

<2016年3月月例会報告>

FIFA スキャンダルと FIFA の行方

田村修一（フリーランスジャーナリスト）

【日 時】2016年3月30日（水）19：00～21：00（終了後は23：30ごろまで「景宜軒（けいぎけん）」）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室

【テーマ】FIFA スキャンダルと FIFA の行方

【演 者】田村修一（フリーランスジャーナリスト）

【参加者（会員・メンバー）19名】安藤裕一（GMSS ヒューマンラボ）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、梅本嗣（会社員(博報堂)）、奥崎覚（フットボールWEBマガジン『Qoly』）、奥山純一（フットリンクープログラマー）、春日大樹（筑波大学大学院）、金子正彦（会社員）、川戸湧也（筑波大学大学院）、小池靖（サッカースポーツ少年団）、笹原勉（会社員）、篠原翼（明治大学大学院法学研究科）、白井久明、関谷綾子（関谷法律事務所）、田中理恵（会社員）、田村修一（フリーランスジャーナリスト）、茅野英一（帝京大学）、徳田仁（(株)セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）、吉原尊男

【参加者（未会員）11名】大谷隆之（会社員）、尾崎和仁（ビバ！サッカー研）、鬼島一彦（MTCJapan ロシア）、国島栄市（ビバ！サッカー研究会）、小石巖（通訳案内士(英語)／関西大学サッカー部OB会関東支部長）、塩川大輔（トレーナー(TETTER TOTTER)）、遠山諒（国際基督教大学）、保科たまき（会社員）、南田貴大（会社員）、森田太郎（Sarajevo Football Project）、守屋佐栄（パート）

【報告作成者】篠原翼（明治大学大学院法学研究科）

0. はじめに

本報告書は、音源が途中で切れていることもあり、随所に報告書作成者の判断でその内容を補強する箇所がある。また、4. 総括以外の項目の主語、たとえば、「私」や「自分」などは、田村修一氏を指している。また、質疑応答についても、音源として残っているものを抜粋し記載している。そのため、月例会内容全体をカバーすることができないが、ご容赦いただきたい。また、基本的には田村氏が話した発言をそのままの形で報告書を作成している。しかし、内容として意味が通らないところは報告作成者が補正を行っている。

【報告内容目次】

1. 自己紹介
2. 報告内容
 - 1) 前置き
 - 2) FIFA スキャンダルの裏幕
 - a) 金銭感覚
 - b) スキャンダル発覚
 - 3) アメリカによる FIFA への法的介入
3. 質疑応答
(その他の質疑応答については、音源が途絶えていたため記載不可)
4. 総括 (報告書作成者)

1. 自己紹介

上記参加者が各自自己紹介を行なった。

2. 報告内容

1) 前置き

みなさん、こんにちは。田村です。今日はよろしくお願ひします。本日は、FIFA の周辺で何が起こっているかについて解説したいと思います。色々なところに、断片的には書いているのですが、全体像がものすごく大きく、また色々なことが絡み合っているので、整理がものすごく大変な問題です。また、不明瞭な部分も多くあり、すべてが整理されているわけではないので、その中で今私がわかっていること、及び憶測的なことも含めてお話ししたいと思います。また、注意してほしいことは、すべてが正しいわけではないことと、自分が言っていることに少なからずバイアスがかかっている場合があることです。

2) FIFA スキャンダルの裏幕

a) 金銭感覚

アベランジェが行なった政策は、サッカーの世界戦略、つまりサッカーを世界に普及させ、第三世界の国々の支持を得ることであり、これによって会長に当選した。その公約を果たすために、彼はワールドカップの参加国を増やしたりだとか、サッカーの発展途上国において、サッカーを発展させるために U-18 (ユース) を設けたりした (コカコーラのスポンサーとしてコカコーラカップという名で開催された)。これ自体は評価されることである。

しかし、アベランジェはすごく野心的な人物であり、スポーツ戦略を通じて金銭を稼ぐことを考えたのであった。しかし、金銭が FIFA に流れてくる前は、腐敗もなかった。その FIFA がスキャンダルを起こすということは、金銭の力によって人間を変えたため、金の力に驚かされる。

第三世界のメンタリティーに共通するところは、貧しい国の人には基本的に人がいいことである。自分は個人的にアフリカが好きだが、アフリカのような経済水準の低い国で生活をしている人は、みんな非常に気のいい人が多い。しかし、これもお金を握ると人間性が変わってしまうのであろう。

これは、FIFA の理事達と同じである。お金がその人のメンタリティーを変えてしまうものであり、FIFA スキャンダルで顕著にそれが現れただけだと個人的に考える。

b) スキャンダル発覚

プラティニとブラッターは共に FIFA の活動の裏で手を汚してきた。正しくは、ブラッターは自らは手を汚すことはなかったが、周りの理事が手を汚すことを阻止しなかったことに問題がある。以下では、どのようにして FIFA で腐敗が蔓延り、そしてスキャンダルが発覚したのかについて整理する。

そもそも FIFA は、上記 a) で示したような腐敗の土壌に基づき問題がすでに起きていた。しかし、その問題も事件として表立って騒がれることもなかった。しかし、なぜ今回の事件だけが顕在化したのかが問題となろう。

それは、プラティニとブラッターの対立が原因であった。つまり、プラティニが FIFA の会長になり、彼の行なったことが、サッカーの政治の世界で問題になった。

顕著な例として、18年・22年のワールドカップというのは、2010年の FIFA の理事会で決まった。その前に FIFA 理事の間で、18年はロシア、22年はアメリカで開催地が決まっていたのである。そして、ブラッターの中では、世界二大大国で大会を開き、その後中国で行う。さらに、パレスチナとイスラエルの間で親善試合を行うことによってノーベル平和賞を取ろうと目論んでいた。さらに先のことであるが、中国は既に 2026 年で決まっていた。

上記のような目論見を持つブラッターを他所に、22年の候補地には、カタールも立候補していた。サルコジがカタール皇太子と投票の10日前にエリザ宮で昼食を共にした。そこに、プラティニも一緒に参加した。そして、サルコジは、丁度カタールとの関係を強めていた時期であり、国益になるという理由でプラティニを説得、そしてプラティニを味方につけた。この会合で何が決まったのかというと、①パリスンジェルマンのカタール資本を売却すること、②アルジャジーラがスポーツ専門のテレビ局をフランスにつくることである。

この会合後、上記の通り、サルコジはこれがフランスの国益だとプラティニに主張し、プラティニはその3日後にブラッターに電話でその趣旨を伝えた。この判断がブラッターの影響下にある3人の理事も寝返らせた。

ブラッターとしては、アメリカに決まっていればロシアと共に素晴らしい大会になっていたと考えていた。そして、これが実らなかったために、アメリカがリアクションを起こしたのである。そこから、スキャンダルへの捜査が始まったと考えられる。

整理すると、①FIFA というような不正を生む体制があり、利権を獲得しようとしている人物が、その確保のために行動すること、②それを告発するような動きがあったが、その行動が FIFA に影響を与えることがしなかったこと、③しかし、今回アメリカを怒らせたことによって、問題の顕在化につながったこと、である。

しかし、自分の一個人の見解として、FIFA の役員が第三国の利権を守っているから、サッカーはこれだけ発展したし、彼らが多少の悪いことを行っていたとしてもしょうがないというような意識でいたが、それでもひどいと思えるような腐敗の状況がある。

3) アメリカによる FIFA への法的介入

上述の通り、アメリカが捜査を開始したことで、FIFA に法的な介入がなされた。しかし、そもそも FIFA の不正の体質は長く温存されてきたものである。この不正の温床に切り込みを入れることができたのでは、むしろアメリカが関わったおかげであり、それは、FBI が捜査したからである。また、ISL 社のときは、スイス司法当局が関わったが、実際に賄賂と認定されたとしても、スイス法に準じて罰金で済んだ。つまり、役職を追放されるなどの法的な措置はなされなかったのである。また、他の役員も同じように汚職を行っていたが、制裁はなかった。

そこで、FBI の2人が東ヨーロッパでの問題を捜査しているときに、ロシアがワールドカップに準じて金をばらまいているという噂を聞きつけ、同時に調査し始めたのが始まりである。そして、アメリカがカタールに投票で負けたことで、アメリカの怒りとプライドに火がつき、捜査が本格化する。アメリカは、FBI はチャックレーザーに絞って捜査を行なった。彼は、トランプタワーに家を持ち、

家賃も払わず税金も払っていない。そして、ワーナーは、トリニダード・トバゴにあった CONCACAS の事務所をトランプタワーに移した。それによって、アメリカの司法管轄権の範囲内に入ったため、その一端の捜査を開始することができた。

また、チャック・ブレイザーが司法取引によって、FIFA の内部情報を横流しさせた。しかし、ヨーロッパ内部にある FIFA 本部を捜査することが困難だった。その頃から、ブラッターはアメリカに渡航していない。なぜなら、確実にアメリカで捜査対象になることがわかっていたからである。

その後、アメリカは、ワールドカップ不正招致を理由として、スイス司法局に FIFA 高官 7 人の逮捕を要請した。さらに、スイス司法当局、アメリカの要請を受け一部秘密口座の情報提供を決めた。おそらく、アメリカは秘密口座の金銭の移動がアメリカの口座を経由していたことを理由として司法介入することができたと考えられる。

3. 質疑応答

中塚：18年は、ロシアかイングランド（に開催地が決まる）という話があったはずだが、これはどうなったのか？また、日本も立候補していたはずだが…

田村：18年としては、ヨーロッパでやりたい。プラティニの思惑は、ヨーロッパならどこでもいい。ブラッターがロシアなら、ロシアはワールドカップをやっていないのでそこでいいだろう。イングランドは、ヨーロッパの中の嫌われ者でありのけ者になっている。フランス・ドイツ・イタリアでヨーロッパのサッカーは回っている。イングランドは孤立しているのである。ワールドカップは一回だけしか開催されていない。しかし、イングランドの中ではこれは必然としている。

また、22年に関しては、アメリカは本気でやりたかった。サッカーを四大スポーツに続く五大スポーツとして定着させたかったからだ。それを世界のトップスポーツにしたい。そのための起爆剤がワールドカップであった。しかし、プラティニが裏切ったことで、アメリカはひどく怒った。プラティニはビル・クリントンに投票の前に同じホテルに泊まっていたため、クリントンによる会いたいという要請を断っている。

そもそもなぜカタールはそこまでして招致したのか？カタールは、ジダンをアンバサダーにするのに10億円かけるなど、表の金を使って取り込もうとした。また、裏の金としては、ホテルにかかった費用などを全て負担する等した。そこには、招待の委員が泊まることになっており、その人々に100万ドルもしくは150万ドルを支払っていた。それでもアメリカに及ばないため、最後にサルコジに助けを求めたわけである。そして、サルコジはパリサンジェルマンの熱烈なサポーターであり、フランスはカタールから外国資本を受け入れようとしている政治状況であったこともあり、カタールを支援した。それによって、プラティニが寝返ることになったのである。

4. 総括

FIFA スキャンダルは、そもそも独立した監視機関がなく、スイス連邦法による実効的な制裁がなかったことに端を発すると思われる。実際に、スポーツに関連する裁判であれば、CAS（スポーツ仲裁裁判所）で行われるが、現在 FIFA が自動的に CAS に付託される条項を FIFA 規則に挿入しているため、提訴すれば強制的に付託される仕組みになっているが、その判決が FIFA 幹部にとって意味のあるものかは問題である。なぜなら、CAS の準拠法は、スイス連邦法であり、上記の田村氏の報告にも出てくる通り、罰金のみでは何の実効性もないと考えられるからである。だとすれば、どのようにして事前に不正を防止するか。そのような問題意識を持って問題を見ていく必要がある。